

# 子育て支援施設における「自主保育」の可能性

— 母親たちがエンパワーされる過程と状況的学習 —

Potential for “Independent Childcare” at a Parenting Support Center  
— The Process of Empowering Mothers and Situated Learning —

加藤直子\* 請川滋大\*\*  
Naoko KATO Shigehiro UKEGAWA

**要約** 地域子育て支援施設は、親子が相互に交流する場として賑わいを見せているが、子供の年齢による遊び方の違いからトラブルが起こるケースも少なくない。母親にとって、子供が3歳を迎えてから、幼稚園入園までの1年間をどう過ごすかが課題となっている。このような背景から、母親達が互いに子供を見守り、子育てについての状況的学習をする場が必要であると考えた。本研究では、子育て支援施設における母親達の「自主保育」を調査し、自己決定や問題解決力を高めていく過程について考察した。分析の結果、子育て支援施設の中で行われる「自主保育」では、リーダーが「緩やかなキーパーソン」として存在していることがわかった。この「緩やかなキーパーソン」が母親同士の円滑な活動を実現させ、母親達は状況的学習をしていると考えられる。母親達が実践共同体に参加し、エンパワーされる子育て支援は、女性活躍社会の実現においても有意義な取り組みであろう。

**キーワード**：子育て支援、自主保育、M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）、状況的学習、エンパワー

**Abstract** Parenting support centers are prospering as a place where parents and children can interact with each other. However, there are many cases where trouble occurs due to differences in how children play. The challenge for mothers is how to spend the years from the age of 3 to kindergarten. Given this context, there is a need for a place where mothers can watch each other's children and participate in “situated learning” about parenting. This paper investigates “independent childcare” by mothers in parenting support centers and it considers the process of improving self-determination and problem-solving skills. Results indicated that leaders exist as “unofficial key persons” in “independent childcare” occurring at parenting support centers. These “unofficial key persons” facilitate activities among mothers, and the mothers participate in “situated learning.” Parenting support in which mothers are empowered by participating in a practical community will be a meaningful initiative to achieve a society with active women.

**Key word** : Parenting Support, Independent Childcare, M-GTA (Modified Grounded Theory Approach), Situated Learning, Empower

## 1 問題と目的

少子化対策の一環として推進されてきた地域子育て支援事業は、2005（平成17）年児童福祉法に規定され、社会福祉法における第2種社会福祉事業と

---

\* 日本女子大学 学術研究員  
Japan Women's University Academic Research Fellow  
\*\* 日本女子大学  
Japan Women's University Child Studies

して位置づけられた。それぞれの施設には親子が集い、相互に交流する場として賑わいを見せている。各施設では、新生児の集いや親子が楽しめる講座を開催するなど、様々な取り組みが行われているが、0～2歳までの親子と2歳後半～3歳までの親子が同じ場で過ごすことで、遊び方の違いによるトラブルなどが起こるケースも少なくない。母親にとって、子供が3歳を迎えてから、幼稚園入園までの1年間をどう過ごすかが課題となっている。また、自治体によっては、親子を「地域に帰す」という名目で、親たち（主に母親）によるサークル活動を推進し、助成金を出すといったケースが見られる。しかし、中心となる「キーパーソン」がいない、仲良しグループだけの排他的な集いになるなど、不特定多数の母親たちが気軽に参加できる場を保障するものではない。子供にとっても、就園前の大切な時期に、今まであった子供同士の交流が途切れてしまうことになる。

このような背景から、子育て支援施設から移行し、就園前の親子が気軽に集い、母親同士が交流しながら、子供を互いに見守る機会を作る必要があると考えた。さらに、互いに子供を見守る中で、母親たちに「状況的な学び」が生まれ、子供の就園を機に、社会に出ていく準備としてエンパワーされる場が必要であると考えた。そこで本研究では、子育て支援施設における「自主保育」を観察し、子供同士の育ち合いを支え合う中で、母親たちの自己決定や問題解決力が高まっていく過程について考察した。

## 2 母親の性役割とエンパワーメント

### 2.1 エンパワーメントとは

エンパワーメントとは、「～する権限を与える」、「～することを可能ならしめる」というように一般的には理解されている。このエンパワーメントの概念、定義については広く議論され、看護、公衆衛生、福祉といった各分野において、それぞれの視点からの解釈がなされている。

ここでは、子育てをする母親のエンパワーメントという観点から、久木田の論を参考にする。久木田(1998)は、「参加は様々な点でエンパワーメントを促進すると考えられ、『リソース』の共有、それらから得られるパワーの集積を可能にする。それにより、大きなパワーへのアクセスとコントロール、より自由な意思決定などを可能にすることで、高いエンパ

ワメントの状態を可能にする<sup>1)</sup>」と述べている。久木田は人がエンパワーされるプロセスとして、5つのレベルからなるモデルがあるとしている。久木田が示したエンパワーメント過程の5段階を Table.1 に示す。

Table 1 Model of empowerment stages

第一段階「基本的ニーズ・レベル」	日常生活での健康や栄養といった基本的ニーズを満たすために行動し、その結果労働量や労働時間の軽減とそれに伴う自由な時間の確保ができる。
第二段階「アクセスレベル」	パワーを生み出す様々なリソースへのアクセスが可能となることによって、社会的、経済的エンパワーメントが進む。
第三段階「意識化レベル」	自己のおかれている状況についての意識化が進む。自分の果たしている役割や変革に向かって自分の果たせる役割について意識化される。
第四段階「参加レベル」	意識化された価値や目標に向けて積極的に参加し、意思決定にも参加する。政治的なエンパワーメントが進む。
第五段階「コントロール・レベル」	全ての側面でのエンパワーメントが進むことにより、新しい関係性が生まれ、他の人々にも働きかける活動が見られる

\*現代のエスプリ No.376「エンパワーメント」  
P30-31 より作成

このように、エンパワーメントとは自身を取りまく個人、コミュニティ、資源にアクセスすることを自己決定し、それらから影響を受けることを受容しつつ、さらにアクセスコントロールを深め、生活やコミュニティを豊かにする力を身に付けていくプロセスであると考えられることができる。

### 2.2 母親の性役割とエンパワーメントの関係

母親たちがエンパワーされる支援を考えると、ジェンダーの問題や男女平等参画社会のあり方を根底におく必要がある。ここでは、ジェンダーと性役割について、内藤の論に触れる。

内藤(1998)は、「ジェンダーとは、性別についての、以下のような認識を含む知、つまりそれを意味づける実践のこと<sup>2)</sup>」としている。「以下のような認識」とは、「『男性』、『女性』という二項対置」、「性

別によって規範化された社会的体系」,『男性』,『女性』間の権力関係,不平等」,「生物学的性別は不変で,社会的文化的性別は可変と言うように,何かをブラックボックスのまま実体視,絶対視してしまう,所与の前提にしてしまうことによるあやまちをあくまで回避しようとするまなざし」を指すと定義している。私たちが,日常で何気なく発している「男だから」,「女だから」という言葉の罪深さをうかがわせる。物事を性差によって分類したり,議論したりすることは不毛であり,個人としてどうあるかを考えていく必要がある。

ジェンダーで論ずるところの,こうした性別に対する固定観念により,日本では長い間,女性の社会参加が阻まれてきた。しかし,1985(昭和60)年に女性差別撤廃条約を批准し,同年に男女雇用機会均等法が制定されたことで,性差別をなくし,労働の場での女性の権利を保護する気運が大きく高まった。こうした流れの中で,1999(平成11)年には男女共同参画社会基本法が施行された。この法令では,性別により区別されない社会形態,男女共同参画社会について「男女が,社会の対等な構成員として,自らの意思によって社会のあらゆる分野における活動に参画する機会が確保され,もって男女が均等に政治的,経済的,社会的及び文化的利益を享受することができ,かつ,共に責任を担うべき社会<sup>1)</sup>」と定義されている。さらに,男女共同参画社会を推進すべく「男女の人権の尊重」,「社会における制度又は慣行についての配慮」,「政策等の立案及び決定への共同参画」,「家庭生活における活動と他の活動の両立」,「国際的協調」の5つの基本理念を掲げている<sup>ii)</sup>。

男女共同参画社会では,これまでの女性保護から,性別にかかわらずその人の特性によりポジションを用意する,個人の尊重という考え方にシフトしている。また,男女が共に自分の思い描く人生を生きる社会の実現へと方向付けている。しかしながら,こうした社会の動きがあるにも関わらず,育児については母親が主に担うべき役割といった,性役割の考え方が根強く残っている。中谷(2014)は,育児期の女性においては,「少なくとも子供が小さいうちは,母親は仕事を持たずに家にいるのが望ましい<sup>3)</sup>」と

いうような,さまざまな形での背圧が働いているとしている。さらに「強固な母親規範意識は,子育ての社会化だけでなく,育児の休息や母親の主体性の回復の阻害要因になるとも推察され,親のエンパワメントを妨げる可能性も考えられる<sup>4)</sup>」と述べている。高等教育を受ける機会が増えた現代においても,女性の社会進出には出産・育児によるキャリアの一時停止や仕事再開のリスクが伴う。渡辺(2015)は「現代の母親は,社会で活躍する機会を用意されていても,結局,仕事か家庭か選択せざるを得なかった世代<sup>5)</sup>」であり,「一人の女性として,自立を阻むさまざまな壁に行く手をふさがれ,息苦しさを感じてきた<sup>6)</sup>」といった状況が,「子供に向き合えない,あるいは子育てに悩む心理と,どこかでつながっているようにおもえてならない<sup>7)</sup>」と指摘している。

少子化対策として始まった子育て支援では,晩婚化や未婚率の上昇にばかり目が向けられたが,現在では「ワーク・ライフ・バランスの実現」や「母親たちの豊かな子育てを支える支援」に重きを置いている。中谷(2014)も指摘しているが,地域子育て支援に求められる親への支援機能は「学び」,「支え」,「エンパワメント」の3つであることは,すでに先行論文において導き出されている<sup>8)</sup>。この3つの機能を軸とし,地域子育て支援の実践例を分析,考察していくことにより,支援のあり方について,一つの流れが提案できるのではないかと考える。

### 3 「子育て支援施設 F」での「自主保育」

#### 3.1 「子育て支援施設 F」の概要

B 大学保育実践研究センターでは,0歳~2歳までの親子が利用することができる「子育て支援施設 F(以下施設 F)」を運営している。施設 Fには,幼稚園教諭の資格を持つスタッフ「保育指導員」が常駐しており,母親の悩みに助言する,親同士の交流を側面から支えるといった支援を行っている。相談の内容は,子供の生活習慣や幼稚園選びなど,母親が子育ての中で感じる日常的な心配事が多い。保育指導員は,相談を受けた母親に対して,次回の来訪時には「最近どうですか」と声を掛けるなど,継続的な援助を心掛けている。また,施設 Fの側で「気になる子」を見かけた場合には,母親に直接的に話すのではなく,来訪の度に声を掛け,気軽に施設に来ることができるようにアプローチしながら,母子の様子を見守り,施設と母親との関係性が途切れない

i) 法令「男女共同参画社会基本法」第2条より抜粋

ii) 内閣府男女共同参画局

<http://www.gender.go.jp/index.html>

ようにするための援助を行っている。さらに、子供の発達について母親から相談を受けた場合には、別室で慎重に対応し、希望があれば大学教員を紹介して対応するといったきめ細やかな支援体制が構築されている。しかし、施設Fを利用できるのは2歳児までのため、子供が満3歳になると、「卒業」することになる。そこで施設Fでは、卒業を迎えた母親たちの主体的な活動である「自主保育」を推進している。

### 3.2 母親たちの「自主保育」

施設Fでは、「地域コミュニティを増やす」、「母親たちの自主的な活動を支援する」、「3歳児が乳児によってセーブされずに活動するための機会づくり」といった観点から、2007（平成19）年より子供が満3歳になった母親たちの「自主保育」を推進している。施設が「自主保育」に期待するものは、「母親たちが互いの子供を見合う」、「就園前に子供同士が関わる力を育てる」、「子供の経験と親の力を引き出す」ことである。また、母親が主体的に活動することにより、社会に出て行くための準備期間としてほしい、エンパワーされる機会としてほしいといった願いも込められている。

保育指導員は、「自主保育」の開催について積極的に促すのではなく、興味を持ちそうな母親に場所を提供していることを周知しながら、申し出を待つ、「やってみよう」という思いを引き出す、母親たちをエンパワーしていく支援を行っている。近年では、母親たちの中で、自らが代表になることをためらう傾向があり、数年は開催されないこともあった。しかし、あくまでも母親たちの「やりたい」という思いを引き出すことを重視している。渡邊(2015)は、「エンパワメントの基本は『寄り添う』ことにあるとし、支援者は専門職であるがゆえに助言、指導に偏る傾向がある<sup>9)</sup>」としている。また、「親の成長のために必要な葛藤まで肩代わりせず、“ともに考える”視点を大切にしてほしい<sup>10)</sup>」と述べている。施設Fにおける母親たちの「自主保育」では、「寄り添う」、「ともに考える」、「見守る」というエンパワメントの基本を実践している。

## 4 調査・分析方法

施設Fでの「自主保育」について、2016年度は2人から申し出があった。保育指導員は、両者を引き

合わせ、(L1)、(L2)の2名がリーダーとなり、メンバー4名を含めた計6名(Table.2)により「自主保育」が行われることとなった。この6名に対し、施設Fの施設内で個別に半構造化面接を実施した(Table.3)。

Table 2 Attributes

表示名	母親の年代	子供の年齢と性別
L1	30代	3歳7ヵ月(男児) 1歳7ヵ月(男児)
L2	不明	3歳7ヵ月(女児) 1ヵ月(男児)
MA	33歳	3歳●ヵ月(女児) 2歳●ヵ月(男児)
MB	30歳	3歳●ヵ月(男児) 2歳●ヵ月(男児)
MC	30歳	3歳8ヵ月(男児) 第2子妊娠中
MD	37歳	3歳8ヵ月(女児) 1歳7ヵ月(女児)

Table 3 Questions

1.利用者の年齢(○歳代)
2.子供の年齢
3.利用を開始した時期
4.子育てに対する感情
5.施設を利用しようと思ったきっかけ
6.利用前後での子育てに対する感情の変化
7.利用することによる子供の変化
8.利用者同士の関係
9.他の利用者と交流する中での気づき
10.子育て支援センターに期待すること
11.利用しやすい子育て支援センター
12.「自主保育」を始めたきっかけ
13.「自主保育」に参加したきっかけ
14.「自主保育」の位置づけと方向性について

調査開始時に、施設と名称使用や調査方法、倫理的配慮事項について書面を交わし、調査対象者にも周知した。さらに、面接時にICレコーダーで録音をすることについてもその都度了承を得た。

母親たちの語りから逐語録を作成し、修正版グラウンデッドセオリアプローチ(以下、M-GTA)により分析した。「自主保育」を行う母親への語りから、

その場で起きている現象を描き出し、理論を生成することが目的であるため、この分析方法が妥当であると考えられる。「自主保育」の観察と M-GTA での分析結果から、母親たちが「自主保育」を行うことによってエンパワーされていくプロセスについて理論を生成し、考察した。

## 5 結果と考察

### 5.1 「母親たちがエンパワーされていく過程」のアウトライン

M-GTA による分析を通して概念とカテゴリーを生成し、その関係から解釈を積み上げ、結果図 (Fig.1) を描いた。分析結果の全体について、概念名、カテゴリー名を用いたストーリーラインを記述し「母親たちがエンパワーされていく過程」について説明する。文中、カテゴリーを《 》、概念を【 】, カテゴリー

リーおよび概念の定義を〈 〉、具体例を“ ”内に示した。また、Table.4 に逐語録から生成された、概念、カテゴリーと語りの例を示す。

#### ●ストーリーライン

母親たちが〈躊躇しながらも子育て支援施設への第一歩を踏み出す〉には、きっかけが必要だ。(L1) は、自ら積極的に情報収集をしていた。また、(L2) も、“新生児訪問で教えてもらった、遊べる場所があると聞いたから来た”と施設 F を訪れたきっかけを語った。「自主保育」のメンバーからは、来訪のきっかけについて、“(L1) が誘ってくれて”という声が多く聞かれた。(L1) は、母親たちが第一歩を踏み出した時点で【情報の収集と発信】をすることができる《緩やかなキーパーソン》として存在していたことが推測される。

《緩やかなキーパーソン》である (L1) は、3 歳

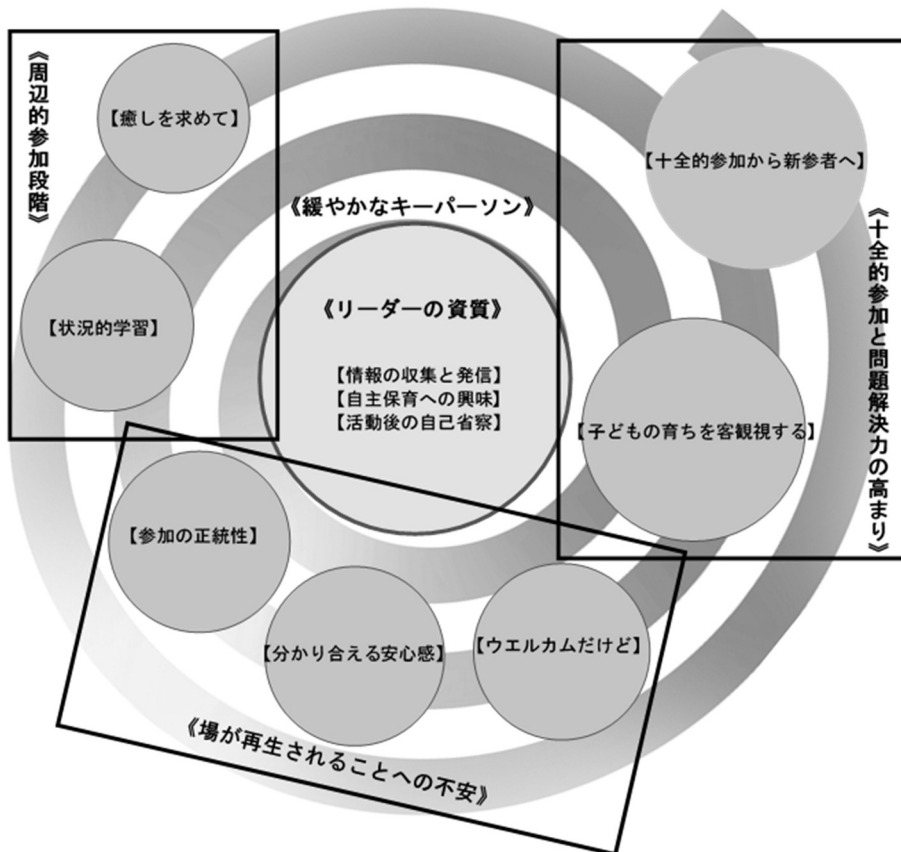


Fig.1 The process of empowering mothers

Table 4 Concept/category and sample narratives

カテゴリー	概念	定義	バリエーション
リーダーの 資質	情報の収集 と発信	遊び場や友だちが欲しいと思ひ、躊躇しながらもはじめの一步を踏み出す。知り合いと一緒に講座があると踏み出しやすい。	<ul style="list-style-type: none"> <li>一人では来にくい。講座などがあって予約してくると来やすいかも。(L1)</li> <li>L1と知り合って。誘ってもらって。(MA) (MB) (MC) (MD)</li> </ul>
	自主保育への 興味	保育指導員に自主保育のについて尋ねている。子供同士の交流をなくしたくないと思ひも強い。保育指導員の促しもあるが、リーダーの資質があると考えられる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>先生にどうですかと言われたけれど、一人で代表をやるのはちょっとなどと思ひ。場所を貸していただいたいて、使わせていただいたてありがたかった。(L1)</li> </ul>
緩やかなキーパーソン	活動後の自己 省察	メンバーである母親たちには見られない、自主保育についての振り返りをしている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>前の方にやり方を聞く機会があっても良かったかも。(L1)</li> <li>準備する人、企画する人がいるといいのかな。(L2)</li> </ul>
	癒しを求め て	求心力のあるリーダーではなく、自分たちのペースを守り、メンバーと調和しながらグループをまとめていくリーダーシップであると考えられる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>今までのリーダーは、サークルの主権者みたいな感じ。(L1)</li> <li>私たちは連絡係みたいな感じ。(L1) がやってくれたから私は何もしてなくて。出産もあったし。(L1) が色々やってくれた。(L2)</li> <li>ほとんど一人で子育てをしていた。初めてのことで、追いつめられていた。(MB)</li> <li>暇を持て余していた。話し相手が欲しかった。(MD)</li> </ul>
周回の参加 段階	状況的な学 び	育児に対する負担感や不安が強い母親にとつて、月齢が上の子供を持つ母親や、負担感、不安が弱い母親は子育てのモデルになる。その周辺にいて、経験としての学習をしている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>同世代のママ友だけじゃなくて、先輩ママに相談した。参考になる話はあるかと思ひていたので。(MC)</li> <li>友だちのママの接し方とかを見て、こうするといいんだとか、毎回学ぶことが多くて。(MB)</li> </ul>
	参加の正統 性	施設Fでの自主保育は、母親たちの自発的な思いから始まる。誕生日を迎えた順にジョインすることができるとは、参加にはその正統性が必要ようだ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>何かイベントがあればいいのかな。自主保育の紹介じゃないけど。(L2)</li> <li>同じ月齢のママがまとまって一緒に入る環境を作ってくれれば、きっかけを作ってくれればいいのかの援助があるといいかも。(MC)</li> </ul>
場が再生産 されること への不安	分り合え る安心感	気心の知れた母親同士の集まりなので、子供を安心して遊ばせることができる。トラブルがあったとしても「お互いさま」で解決できる関係性が構築されているため、母親は安心して子供を遊ばせることができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>小さい子が来ていている場所では、規制や注意をしなければならぬ。(L1)</li> <li>他の子に何かされた時に相手の親がどういう対応をするかとか。(MB)</li> <li>私は、子供同士のケンカもどんどんさせたいという気持ちなんだけど、そういうのが分り合えるかなとか。(MD)</li> </ul>
	ウエルカム だけど	満3歳を迎えた母子が、自主保育に参加することで、場が再生産されると考えられる。しかし、既存のメンバーは、後からメンバーが増えることを歓迎すると言いつつも、自分たちの空間が変化することに対し、多少の不安を感じているようだ。	<ul style="list-style-type: none"> <li>私だとしてもどうかかな、一人で入るのは。(L2)</li> <li>やっぱり、お母さん的には居心地が悪いかも。出先上がっているところに入っていくのは大変かも。(MA)</li> <li>もう仲良くなっているところに1人で入るのは、私ではできないと思う。(MC)</li> </ul>
十全的参加 と問題解決 力の高まり	子供の育ち を客観視す る	母親は、集団の中での子供の育ちを考へるようになっていく。子供成長にとつて、この自主保育が必要だった、良い経験となつたと捉えている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>3歳になりたての頃は、ケンカもたくさんあった。取り合いとか。ここ最近、3歳半くらいからは、だんだんと楽しく遊べるようになってきた。(L1)</li> <li>子供達もやりたいことを実現する方法を見つけるようになった。(MC)</li> </ul>
	十全的参加 から新参者 へ	子供の成長により、また新しい環境に一步踏み出す。自分たちで自主保育をおこなうといった、場を十分に活用できる「十全的参加」の状態から新参者になる。しかし、子育てや母親としてのスキルは高まっている。	<ul style="list-style-type: none"> <li>幼稚園でもまた新しい人間関係。このメンバーがいる安心感はある。(MA)</li> <li>ここに来る日はお休みと言う感じ。ちょっと目を離しても大丈夫だから。(今後) ママ友と深くかかわるかはわからない。もう友だちは大丈夫だし。(MC)</li> <li>出産前は、母親同士の関係は心配だったけれど、変わりましたね。(MD)</li> </ul>

になると施設Fを利用できなくなってしまう、<子供同士の交流をなくしたくない>という思いから<保育指導員に積極的に尋ねる>など【自主保育への興味】を抱いている。「自主保育」が開始してからは<メンバーである母親には見られない、「自主保育」についての振り返り>をしている。(L2)もまた“準備する人、企画する人がいると良いのかもしれない”と、みんなで楽しむためのイベントを開催できなかったことについて振り返っている。このように、リーダー2名は【活動後の自己省察】をしている。2人には《リーダーとしての資質》があると考えられる。施設Fに来た当初の目的は、リーダー、メンバーともに<母親自身のリフレッシュ>であり【癒しを求めて】一歩を踏み出している。さらにこの場に集うことで、知らず知らずのうちに“周りの人と情報交換”をしたり、“他のママの(子供への)接し方”を見たりしながら【状況的な学び】をする《周辺的参加段階》となる。

しかし、6人による「自主保育」が始まっても、子供が3歳を迎えると移行してくるはずの母子が現れない。母親たちは【参加の正統性】が保障される要因を探る。「自主保育」を行う母親たちの中には<子供同士のトラブルがあったとしても「お互いさま」で解決できる関係性>が築かれ、「自主保育」の場は【分かり合える安心感】がある、母子の安全地帯になっている。こうした関係性の中に、3歳を迎えて移行してくるはずの母子を迎え入れることについて、母親たちは【ウエルカムだけど】と話す、“私だとしてもどうかな、一人で入るのは”の言葉の裏には、<自分たちの空間が変化することに対する不安>が見え隠れする。母親たちは《場が再生産されることへの不安》を抱いている。

母親たちは、「自主保育」を行う中で、<集団の中での子供の育ち>を意識し始める。“ここ最近、だんだんと楽しく遊べるようになってきた”，“ケンカが減ってきている”というように、【子供の育ちを客観視する】ようになり、集団の中での子供の育ちとその大切さを実感していく。子供の就園のタイミングで「自主保育」は終了となり、母親たちは、<場を十分に活用できる「十全的参加」の状態から、新たな場での新参者になる>、つまり【十全的参加から新参者へ】と移行していくのだが、“幼稚園ではまた新しい人間関係だけど、このメンバーがいるという安心感はある”，“出産前は、母親同士の関係は心配

だったけれど、変わりましたね”のように<子育てや母親としてのスキルは高まっている>。《十全的参加と問題解決力の高まり》といった姿が見られ、母親たちがエンパワーされていることが示唆される。

## 5.2 《リーダーの資質》

母親たちの語りを分析していく中で、今回の「自主保育」では子育てサークルを主催するといった求心力のあるリーダーではなく、《緩やかなキーパーソン》が存在することが分かった。この《緩やかなキーパーソン》については、<求心力のあるリーダーではなく、自分たちのペースを守り、メンバーと調和しながらグループをまとめていくリーダーシップ>と定義づけた。概念【情報の収集と発信】を生成したバリエーションを見ると、(L1)の周囲に、だんだんと母親たちが集まっていった過程が見える。

(L1)は、施設Fの存在を知り、(MD)を誘って来所した。施設を気に入る、施設F以外の場所でも出会った母親たちにも勧め、共に来所している。つまり、

(L1)はもともとこのメンバーの中でのキーパーソンであったと考えられる。

(L2)も(L1)と同様に、子供が3歳を迎え、施設Fに来られなくなってしまうといった危機感を感じ、保育指導員に「自主保育」について積極的に尋ねている。2人とも「先生に声を掛けてもらって」と話したが、保育指導員が「自分1人がリーダーになるのは」と躊躇している(L1)に、「自主保育」に興味を持つ(L2)を引き合わせ、もともとリーダーとしての資質があると考えられる2人によって「自主保育をリードさせよう」という、側面からの働きかけがあったと考えられる。中谷(2008)は「母親の中にキーパーソンとなり得るものを発掘するのも支援者の役割」であり、子育て支援の場にはキーパーソンの存在が不可欠であるとしている<sup>14)</sup>。また、(L1)が親しく交流している5人の中に(L2)が加わったことで、仲良しグループの排他的集いではなく、不特定多数が参加できる集いとしての要件を満たしていると考えられる。(L2)は、第2子出産のため、「自主保育」に参加できないこともあり、“(L1)がやってくれたから私は何もしてなくて。出産もあったので。(L1)が色々やってくれた”と話す場面もあった。こうした語りからも、(L1)がメンバーと調和しながらグループをまとめていくリーダーシップがある《緩やかなキーパーソン》として存在していると考えら

れる。

施設Fの「自主保育」では、毎回の活動後に母親たちが「自主保育活動記録」を記入している。この活動記録は主に(L1)、(L2)が記入し、保育指導員とやり取りをしている。保育指導員は、活動記録に書かれた母親たちの思いや振り返りについて、保育者の視点からフィードバックやアドバイスをしている。Table.5にリーダーの記述と保育指導員からのフィードバック、アドバイスをまとめた。

「自主保育」を始めたころのリーダーの記述は、「子供が自由に走りまわって楽しそう」というように、その場の報告のみであったが(Table.5, 1回目, 下線部), だんだんと子供たちの遊びに対する考察, 気づきが入るようになっていく(Table.5, 5回目, 下線部)。そして、「みんなで遊ぶ時, 一人で遊ぶ時など, 遊び方が変わってきた」というように記述に変化が見られ(Table.5, 9回目, 下線部), 10回目では「子供たちで自由に遊びを考えられるようになり, とても貴重な機会となった」と記されている。これは, 保育指導員が(L1)の記述を受け, 子供の様子を「3歳ならではの姿」と解説しつつ(Table.5, 1回目, 波線部), 「友だちとのかかわり, 一緒に遊ぶ楽しさを, 活動を通して体験させて」といった助言をしたことが効果的であったと考えられる(Table.5, 5回目, 波線部)。また, 子供たちの様子について「仲間意識の高まり, 互いのことを考える」, 「大きな成長」がある(Table.5, 9回目, 波線部)というように, 保育指導員が「自主保育」の成果を(L1)に伝えることで, (L1)が徐々に子供を客観的視点でとらえるように変化していったと考えられる。保育指導員は, 「自主保育」が始まる前から, (L1)

のリーダーの資質に気付き, (L1)に対して「自主保育」についてそれとなく話をしている。また, 「自主保育」開始後は, 【活動後の自己省察】を重ねる(L1)の《リーダーの資質》を高め, さらにエンパワーされていく援助をしていると言える。

### 5.3 《周辺の参加段階》

母親たちが施設Fに集う目的は【癒しを求めて】が多く, 本研究での分析結果では, 母親たちが子供の遊び場として子育て支援施設を利用するという思いを持つのは, 自身のリフレッシュが達成された後であると考えられる。また, 母親たちは「友だちのママの接し方を見て, こうするといいんだとか, 毎回学ぶことが多い」とや「同世代のママ友だけではなく, 先輩ママに相談した。参考になる話を色々聞きたいと思っていたので」と語っている。これは, レイヴ&ウェンガー(1993)の「正統的な周辺性に十分長くいることで, 学習者は実践の文化を自分のものにする機会に恵まれる<sup>12)</sup>」に同じであり, 母親たちにとっては施設Fに集い, 月齢が上の子供を持つ母親の周辺にいたり, 母親同士の交流を重ねたりすることが【状況的な学び】になることが分かる。

レイヴ&ウェンガー(1993)は「実践共同体の十全的成員となるには広範囲の進行中の活動, 古参者たち, さらに共同体の他の成員にアクセスできなければならない。さらに, 情報, 資源, 参加の機会へのアクセスも必要である<sup>13)</sup>」と述べている。ここでの母親たちは, まだ場を十分に活用できる状態ではなく, 支援施設への一歩を踏み出し, 集うことで, 自身が癒される, 状況的学習を始める段階であり《周辺の参加段階》であると考えられる。

Table 5 “Voluntary childcare activity log”

#### Interaction between leaders and childcare instructors

	活動内容 (リーダーの記述)	保育実践研究センターより (保育指導員の記述)
1回目	3歳になり動きが活発になった。 <u>自由に走り回り楽しそう</u> でした。	子供同士の物の貸し借り、トイレに一緒に行くなど、3歳ならではの姿。親子で楽しみながら、情報交換する活動にしてください。
5回目 (4か月後)	最初の頃より、 <u>みんな友だちと遊ぶのが上手になりました</u> 。	「友だちとのかかわり」の姿が見られてきました。一緒に遊ぶ楽しさ、相手に伝える方法を、 <u>活動を通して体験させてあげてください</u> 。
9回目 (7か月後)	みんなで遊ぶ時、一人で遊ぶ時など、 <u>遊び方が変わってきた</u> ようです。	仲間意識の高まり、互いのことを考える、 <u>といったことができるようになってきた</u> のでは。大きな成長です。



#### 5.4 《場が再生産されることへの不安》

6人による「自主保育」が始まり、母親たちは子供同士のトラブルがあったとしても「お互いさま」で解決できる関係性を築き、母子の安全地帯の中で【分かり合える安心感】を満喫している。實川・砂上(2013)は「母親は、ママ友との親しさの異なる関係を、『仲が良い・友だち』と『知り合い・一緒のグループにならない・顔見知り』とに分けて捉えている<sup>14)</sup>」とし、これらの「親しさの度合い」は「『同質感』と深く関連づけられている」と指摘する。また、この「同質感」には母親が「私個人」として「同じ」と感じられる「個としての同質感」と、「親役割を担う者同士」としての「親役割の同質感」があるとしている<sup>15)</sup>。この「自主保育」は、(MD)が“子供同士のケンカもどんどんさせたいという気持ちなんだけど、そういうのが分かりあえるか”と語るように、「個としての同質感」を持つ仲良しグループの活動ではなく、「親役割の同質感」、つまり「親役割」として同じ価値観を共有できる母親の集いであると言える。

しかし、「自主保育」を始めた当初には次々に合流してくると思われた、子供が3歳を迎えた母親が現れない。これについて、筆者は【参加の正統性】が必要であると考え、この【参加の正統性】をく施設Fでの自主保育は、母親たちの自発的な思いから始まる。誕生日を迎えた順にジョインすることができるのだが、参加にはその正統性が必要なようだと定義した。母親たちからは、“同じ月齢のママが一緒に入る環境があればいいのか”、“自主保育を紹介するとか、何かイベントがあればいいのかな”など、

【参加の正統性】を保障するための要因が語られた。堂本(2008)は、公園を子育て実践共同体として捉え、「新しい人を受け入れる文化があるということは、その相手がこちらの受け入れに乗る乗らないは別として、『公園』の再生産において重要な要因であることは間違いないだろう<sup>16)</sup>」と指摘している。「自主保育」を行う母親たちの語りでは、一見、この「重要な要因」をクリアしているかに思われる。しかし、新しいメンバーを迎え入れることについて、母親たちは【ウエルカムだけ】と語りつつ、“もう仲良くなっているところに1人で行くのは、私はできないと思う”といった本音も聞かれた。概念【ウエルカムだけ】の裏には、自分たちの空間が変化することに対する不安、つまり《場が再生産されることへ

の不安》があると考えられる。

レイブ&ウェンガー(1993)は、「独自の見方をもって新参者に正統的参加を認めると、連続性-置換の矛盾に関するありとあらゆる緊張関係がすべての実践共同体に入り込んでくることになる<sup>17)</sup>」と述べている。しかし、施設Fでの「自主保育」では、子供の就園のタイミングで、今年度の「自主保育」は終了となるため、自然と場が再生産されることになる。こうした場の再生産について、正統的周辺参加では「古参者」と「新参者」の入れ替わりによる「連続性と置換の矛盾」を指摘するが、施設Fでの「自主保育」においてはこの矛盾を回避することができると考えられる。筆者がこの「自主保育」に期待するものは、仲良しグループの排他的なサークル活動に代わる、不特定多数の母親たちの集いの保障にある。この「自主保育」は、子育て支援施設内で正統的周辺参加における「古参者」の役割も担う保育指導員によって側面から支えられた母親たちの主体的活動である。これにより、集いと場の連続性は保たれると考えられる。また、メンバーは年子の子供を持つ母親が参加するのでない限り、全員が入れ替わる。母親たちの関係性の中では、「古参者」や「新参者」は存在せず、再生産に伴う両者の緊張関係やコンフリクトはあり得ない。さらに、年度途中から自主保育に合流する母親の《参加の正統性》を担保することによって、不特定多数の母親たちの集いの保障につながると思う。

#### 5.5 《十全的参加と問題解決力の高まり》

母親たちは、「自主保育」を行う中で、集団の中で子供の育ちを意識し始める。“ここ最近、だんだんと楽しく遊べるようになってきた”、“ケンカが減ってきている”、“幼稚園に行く前段階として良かった”というように、【子供の育ちを客観視する】ようになり、子供同士の育ち合いの大切さと、子供がそれによって成長していることを実感していく。

レイブ&ウェンガー(1993)は、「学習を必須の構成要素とする社会的実践への関わり」である正統的周辺参加の概念では、徒弟制を例に教育者である「親方」の「脱中心化」が重要であるとし、「熟練というものが親方の中にあるわけではなく、親方がその一部になっている実践共同体の組織の中にある<sup>18)</sup>」と指摘している。また「教育者としての親方の脱中心化した見方というのは、分析の焦点を、教える行為

(teaching) から離れさせて、共同体の学習の資源の複雑な構造化に向けさせること<sup>19)</sup>と述べている。施設Fでの「古参者」の役割も担う保育指導員に支えられる母親たちの状況的学習はもちろん、「親方」としての役割をも担う保育指導員による「自主保育」へのフィードバックと次に向けてのアドバイスは、教える行為 (teaching) ではない。実践共同体の中にありつつ、自ら課題に気づく、また気づかせることである。さらに、レイヴ&ウェンガー(1993)は「学習のカリキュラムは本質的には状況に埋め込まれたものである」とし、学習が生まれる実践共同体とは「参加者たちが自分たちは何をしているか、またそれが自分たちの生活と共同体にとってどういう意味があるかについての共通理解がある活動システムへの参加を意味している<sup>20)</sup>」と述べている。つまり、こうした状況の中での気づきが、リーダーのみならず、母親たちが「自主保育」を進める上での手掛かりになったと考えられる。保育指導員は、子供同士のいざこざの場面では、「お母様方の優しい声かけと見守りの中で、帰宅時には気持ちを切り替えていましたね」といったフィードバックをしており、このように側面から援助され、見守られながら活動する中で、母親たちは内発的に動機づけられ、自己決定力や問題解決力を高めていったと考えられる。

【十全的参加から新参者へ】は、新たな環境へ踏み出していく母親の姿そのものであるが、“このメンバーがいるという安心感”や“出産前は、母親同士の関係は心配だったけれど、変わりましたね”の語りに見られるように、子供を介した人間関係の築き方や、子育て資源を活用する方法を習得している。さらに、その場面での自身の役割を自覚するようになる。

【十全的参加から新参者へ】を生成した語りで、(MC)は“ここに来る日は、ちょっとお休みと言う感じ。ちょっと目を離しても大丈夫だから”と語っている。中谷(2014)は「親責任のまなざしが強い社会の中で、『子供から目を離してもよい』という考え方は、母親ではない『自分』にふと返ることができる貴重な時間を生み出すものとして機能していると思われる。母親の主体性やエンパワメントの促進を考えると、こうした自分に帰る時間こそが、その出発点になるものと思われた<sup>21)</sup>」と述べている。施設Fで「自主保育」を行う母親たちは、中谷が指摘するように「母親ではない『自分』にふと返ること

ができる貴重な時間」を感じていることが分かる。母親同士が活動をコントロールすることによって、自身の役割を自覚し、互いにゆとりが生まれる。こうした中で、母親たちは場を十分に活用できる「十全的参加」の状態となり、主体性の獲得やエンパワメント促進の出発点に立ったと言える。

さらに中谷(2006)は、子育て支援拠点で提供される支援について「子育て当事者のサービス選択の自由はあっても、支援内容や活動内容を創造し発展させていく自己決定を含んだ参加が実現されているとは言い難い<sup>22)</sup>」と指摘している。一方で、施設Fにおける「自主保育」では、保育指導員からの援助の下、母親たちが相談し合いながら、子供の活動をリードすることで、【子供の育ちを客観視する】力や、自己決定力、問題解決力がもたらされるといった《十全的参加と問題解決力の高まり》がみられる。母親たちは、子供の就園を機に施設Fにおける場を十分に活用できる「十全的参加」の状態から、新しい場所での「新参者」へとになっていくのだが、こうした一連の流れの中で、エンパワーされていることが示唆される。

## 6 結論

子育て支援施設の中で行われる参加者の主体的活動では、リーダーが子育てサークルとは違い、「緩やかなキーパーソン」として存在していることがわかった。この「緩やかなキーパーソン」が、母親同士の円滑な「自主保育」を実現させ、子供たちの育ち合いによって生じる問題を解決していく中で、自身はもちろんのこと、参加する母親たちも、子育て環境における状況的学習をしながらエンパワーされていると考えられる。つまり、母親達は、冒頭で示したエンパワーの5段階 (Table.1) の「アクセスレベル」(第二段階: パワーを生み出す様々なリソースへのアクセスが可能となることによって、社会的、経済的エンパワメントが進む) から、「意識化レベル」(第三段階: 自己のおかれている状況についての意識化が進む。自分の果たしている役割や変革に向かつて自分の果たせる役割について意識化される。)を経て、「緩やかなキーパーソン」として存在する母親 (L1) については、「参加レベル」(第四段階: 意識化された価値や目標に向けて積極的に参加し、意思決定にも参加する。)の段階まで到達していると言える。

子育て支援施設に足を運ぶ母親の多くは、「誰かとつながりたい」という思いを持っている。来所当初では、支援者が同じ月齢の子供を持つ親同士を結び付けるといった直接的な介入も必要である。そして、その場に慣れてきた母親たちに対しては、内発的に動機づけられるような場面を作る、その人が持つ潜在的能力に気付かせるといった、一歩先の支援が大切である。汐見（2008）は、子育て支援とは親の肩代わりをすることではなく、「親としての姿勢や親としての力量を高めるための支援である<sup>23)</sup>」と述べている。また、「親としての力を身につけていく上で、最も大事なものは、親として自己決定しながら育児を続けていくこと<sup>24)</sup>」と指摘している。親となること、子供を育てることによって、人は大きく成長する。母親たちが、実践共同体に参加し、自己決定し、生活やコミュニティをコントロールする力をつけることは、女性が社会へ進出するための準備となる可能性をも含む。母親たちがエンパワーされる子育て支援は、女性活躍社会の実現においても有意義な取り組みであると考えられる。

中谷（2008）は、支援する側からのトップダウン的な方法ではなく、母親たちが主体的に活動する子育て支援の実践を例にあげ、「特に今後の子育て支援においては『子育て=女性』というイデオロギーからの解放を目指し、子供を犠牲にすることなく『自分らしく輝くこと』つまり『私らしさ』を発揮していくことをも視野に入れる必要がある<sup>25)</sup>」と述べている。先に述べたように、地域子育て支援が担うべき機能は「学び」、「支え」、「エンパワーメント」である。こうした意味において、子育て支援施設での「母親同士の結びつき」と「母親同士の主体的活動の実践」といった2段階の支援は、母親たちが実践共同体の中で学習し、エンパワーされる場を創出する手段として有効であるといえよう。

#### 【引用】

- 1) 久木田純 1998「エンパワーメントとは何か」『現代のエスプリ』No.376, 至文堂, P28-29
- 2) 内藤 和美 1998「ジェンダーと性役割」『学術の動向』4月号, 日本学術協力財団, P20
- 3) 中谷奈津子 2014「地域子育て支援事業利用による母親の変化 - 支援者の母親規範意識と母親のエンパワメントに着目して -」『日本保育学会 保育学研究』第52巻3号 P320

- 4) 同上 P321
- 5) 渡辺顕一郎 橋本真紀 2015『詳解 地域子育て支援拠点ガイドラインの手引き 子供家庭福祉の制度・実践をふまえて』中央法規 P27
- 6) 同上
- 7) 同上
- 8) 3) に同じ P320
- 9) 5) に同じ P45
- 10) 同上
- 11) 中谷奈津子 2008『地域子育て支援と母親のエンパワーメント 内発的発展の可能性』大学教育出版 P24
- 12) ジーン・レイブ エティエンヌ・ウエンガー 佐伯 胖/訳 1993『状況に埋め込まれた学習 正統的周辺参加』産業図書 P77
- 13) 同上 P83-84
- 14) 實川慎子 砂上史子 2013「母親自身の語りにみる「ママ友」関係の特徴 - 相手との親しさの違いに注目して -」『日本保育学会 保育学研究』第51巻1号 P98
- 15) 同上 P98
- 16) 堂本真美子 2008「子育て実践共同体としての「公園」の構造について - 「正統的周辺参加」論による分析を通して -」『日本子供社会学会 子供社会研究』第14号 P85
- 17) 12) に同じ P103
- 18) 12) に同じ P75-76
- 19) 12) に同じ P80
- 20) 12) に同じ P80
- 21) 3) に同じ P328
- 22) 中谷奈津子 2006「地域子育て支援施策の変遷と課題 - 親のエンパワーメントの観点から -」『社会保障研究』11月号, 国立社会保障・人口問題研究所 P171
- 23) 汐見稔幸 2008『子育て支援シリーズ 1 子育て支援の潮流と課題』ぎょうせい, P16
- 24) 同上
- 25) 11) に同じ V

#### 【付記】

本論文は、日本女子大学家政学研究科児童学専攻に提出した修士論文の一部であり、日本子ども社会学会 24 回大会にてその一部を発表したものである。

